

中国帰国生徒の異文化適応例

ジャーナル・アプローチを通して

倉谷治賀子

(広島市立幟町中学校 帰国・入国生徒学習教室)

《 目次 》

はじめに

中国帰国生徒の現状と抱える問題

異文化間コミュニケーションの手段としてのジャーナル・アプローチとは
ジャーナル実践例

総合的な考察

帰国生徒へのジャーナル活用の意義と展望

はじめに

現在広島市には多くの中国帰国者が暮らしている。そのうち日本語の全く話せない2世3世の占める割合は、かなりのものになる。彼らの日本での生活は、国費帰国して各地にある定着促進センターなどで日本語や日本の生活習慣などについて事前学習ができる1世とその家族とは異なる。彼らは他の何らかの施設に所属したり通ったりして、自らの力で日本での生活基盤となるものを培っていかなければならない。現在広島市には広島県の施設である帰国者自立研修センターや、夜間中学校、公民館、国際センターにおいて帰国者を対象に日本語学習の場が設けられている。2世3世の中にはもちろん学齢期の者もあり、彼らを受け入れるのは自ずと生活圏内にある公立学校ということになる。広島市内の小中学校の中には日本語を母語としない児童生徒のための教室が設けられており、その対応を図っている。筆者が勤める広島市立幟町中学校もそんな学校の1つで、5年前か

ら教室が設置されている。

中国帰国生徒にとってやはり最も不自由するのは日本語である。しかし、彼らが抱える問題は決して言葉の面だけではないということを、彼らとの関わりの中で痛感している。このレポートでは異文化の中で暮らし、様々な思いに揺れる帰国生徒の適応を追い、それを支えるための援助について考察してみたいと思う。

中国帰国生徒の現状と抱える問題

広島市内の中心部には県・市営の高層アパートが立ち並んでいる。そこには在日韓国・朝鮮人や各国からの留学生、就労者そして中国帰国者たちが多く住んでいる。そのためアパートが学区内にある学校には、多くの外国人生徒が通っている。現在、幟町中学校にも33名の帰国・入国生徒が在籍しており、そのうち4名が両親の就労や留学に伴う入国で、それ以外はすべて中国帰国生徒（以下、帰国生徒と呼ぶ）である。中国帰国者たちには、2世・3世の呼び寄せにより子どもがいる世帯が多く、そして今後もその数は増加する傾向にあるという。帰国・入国生徒学習教室と呼ばれる教室（以下、帰入国教室と呼ぶ）では、帰国（来日）したばかりの生徒をはじめ、まだ一斉授業についていけない生徒を取り出し、日本語や教科の個別授業をしている。もちろんそこは学習の場としてだけでなく、異文化の環境で暮らす彼らのメンタル・ケアの場としての役割も果たしている。担当教員が2人常時待機しており、中国語のできる講師も配属されている。そこに行けば仲間がいて、中国語を思いきり話せるという場があることは、日本語ばかりで窮屈な思いを強いられている彼らにとって、ある意味でオアシスのような存在となっているのかもしれない。

現在帰国生徒のほとんどは祖父や祖母を頼ってきた3世であり、小学生の時に帰国しているケースが多い。よって日本語が全く話せない生徒が中学校に編入学してくることは比較的少ない。しかし少数とはいえ、帰入国教室で最も対応が必要となるのは帰国して間もない彼らなのである。在日期間が短い生徒ほど、帰入国教室が関わるが多くなる。何よりもまずコミュニケーションの手段となる日本語を習得させなければならない。その対応として学校現場に日本語教育が必要となり、これまでも様々な所でその方法、教材についての実践と研究がな

されてきた。帰入国教室といった場も、そのために設けられたといってもいいだろう。

しかし、日本語学習を保障し、日本語が話せるようになることばかりに目が行き、生徒1人1人の異文化適応やその渦中にある彼らの気持ちにまでは、なかなか対応しきれていないのが現状である。彼らは言葉以外にもわからないことだらけの環境で、授業やその他の活動に参加しなければならない。周りを見渡し、行動を合わせていかなければならない。言葉が通じない状態で、心を許せる友達が急にできるはずもない。また、たとえ生徒本人が日本語が話せるようになり、生活に適応できたとしても、抱える問題はあ

る。彼らの家族の中で最も日本語の上達が速い子ども達は、早い時期から家族の通訳として活躍するようになる。両親の世代になると、日本語の習得はかなり難しい。だから子ども達は保護者に代わって市役所や区役所に手続きにも行くし、家族が病気にでもなれば、病院に付き添っても行かなければならない。そのためしばしば学校を休んだりもする。事情のわからない両親には相談できず、1人で判断し決定しなければならないことも多々ある。自分がしっかりしなければならない、家族を支えていかなければならない、というプレッシャーを感じていることであろう。

それ故、例え学校で何かがあったとしても、それを家庭内でフォローすることは難しい。両親に負担をかけまいと胸の内を証さない生徒もいる。彼らは、やりどころのない気持ちをかかえたまま、窮地に陥ることもあるのだ。きっと我々には想像もつかない、相当なストレスを感じ、様々なところで悩んでいることであろう。

このように帰国生徒の抱える問題を考えてみると、日本語学習とならんで彼らに必要なのは、きちんと理解し合える人間関係とその状況に応じた対応だといえる。しかし中学校ではクラス担任と教科担当者とが分かれているため、教師との関係も必然的に薄くなる。帰入国教室においても、日本語が話せるようになっていけば、年齢的なことも重なり担当教員との接触も持ちにくくなる。よって彼らの状況を把握しようにも、その基本ともいえるコミュニケーションが不足してしまうのである。

異文化間コミュニケーションの手段としてのジャーナル・アプローチとは

では異文化で育ち、外国語としての日本語を話す彼らにとって必要なコミュニケーションとは一体どんなものなのであろうか。

ここで、異文化間のコミュニケーションについて少し考えてみたい。異文化間のコミュニケーションといえば、いかに外国語をうまく操れるようになり、異文化において意思疎通ができるようになるかが求められると思われがちである。しかし、たとえ日本語が上手に操れても、それが必ずしも理想的なコミュニケーションにつながり、異文化における人間関係を築く方向に向かうとは限らない。言葉によるコミュニケーションは重要な手段ではあるが、決してその技術的な面のみが求められるわけではないのである。

人間のコミュニケーションの図り方や対人関係の持ち方というものは、予測のつかない可変的な状況や多様な条件のもとに、手探りで経験的に習得されていくものであり、相手との差し向かいの相互作用を重ねて確かめていくしかないものである。また、コミュニケーションには、伝えたい、理解されたい、理解したいといった動機づけが不可欠となる。そのような精神の内面活動があって初めて、言語能力が生かされるのである。日本語教育において、そのようなコミュニケーションの下地を作ってやることも、1つの課題であると考えられるだろう。そして、学習者の異文化接触から異文化理解にいたる心理的プロセスも、教育活動において見逃すことはできない。日本で生活する中で、異文化接触は拡大するのは確かだが、それが必ずしも異文化理解につながるような、深みのあるものになるとは限らないのである。

更に、ある文化を背景に自我の発達を既に確立させた者は、自文化での価値判断や対象文化への先入観も有しており、発達過程における小さな子どものように自然に異文化を学び取り、馴染んでいくわけにはいかない。また帰国生徒の場合、家庭内で自然に教えられて知るということも望めない。両親の持つ文化背景もやはり中国であり、彼らと同じく日本という異文化の中で模索の日々だからである。よって、彼らにとって異文化接触の主な場となる中学校では、その点の配慮が必要になってくるはずである。

では一体、日本語習得の過程にある帰国生に必要な異文化間コミュニケーショ

ン、ひいてはそれを導く日本語教育、帰国生徒教育とは具体的にどんなものであろうか。ここで取り挙げたいのが倉地暁美氏が提唱している「ジャーナル・アプローチ」である。倉地氏によると、ある特定の異文化を学ぼうとする者（以下、学習者と呼ぶ）を偏りのない総合的な文化理解に導き、日本語運用能力をつけるためには、学習者と異文化の偶然的な出会いに任せておくだけでなく、異文化の中で得た情報や刺激に対して、学習者に適切なフィードバックを与える特定個人との対人的相互作用が不可欠になってくるという〔注『対話からの異文化理解』pp120~138〕。その特定の個人を「学習援助者」と呼ぶ。学習援助者は、学習者の対象文化に属する。その学習者と学習援助者の間を取り持つのが1冊のノートのジャーナル（日誌）なのである。

学習者はノートに、異文化に身を置く中で感じたこと、考えていること、疑問に思うこと、相談したいこと、思い出したこと、経験したこと、悩んでいること、聞いてもらいたいことなどを自由に書き留める。学習援助者は、それに対して必ず何らかのフィードバックを与え、短期間のうちにそれを返すことにし、学習者は返されたノートにまた新しく記述を書き加えて提出する。このような形で、相互作用を長期間にわたって交代で継続させていく。つまり「書くこと」により、1対1の内面的な接触を通して相互に異文化体験の幅を広げ、深めていくという事なのである。

このフィードバックには教育的な配慮が求められる。学習者が、その限られた情報や判断基準に基づいて、独断と偏見で歪んだ異文化像を作り上げないためには、一時的ではない、共感的理解を導く方向を常に意識しなければならない。直接的な接触とこのジャーナルによるコミュニケーションを通し、信頼関係を築いた結果、学習援助者は適切なインフォーマー（情報提供者）として、異文化理解を促すことができるのである。

そして学習者は日本語を使って書くことの練習ができるのと同時に、自分の状況や心情をゆっくりと反芻しながら考えることができる。客観的な視点を得たり、情緒不安定な状態から脱却することもできるであろう。

さらに付け加えなければならないのが、ジャーナル・アプローチのメリットは学習者だけではなく、学習援助者の側にもあるということである。そこにあるのは常に「相互作用」であり、学習援助者も学習者と対話を続けていくことで、閉

ざされた日常、経験、価値観、感覚から解放され得るのである。

実際にこのジャーナルが学校現場において帰国生徒教育に活用できるものならば、かなり有効な手だてではないかと思われる。不足しがちなコミュニケーションの機会となり、そこから、不安定な家庭の状況や学校でのストレスを知ることできるだろう。また、教師との間に信頼関係が確立され、きちんと異文化と向かい合えるようになれば、とかく孤立しがちな状況を打破する力ともなるかもしれない。

ジャーナル実践例

ここでは、1人の帰国生徒とのジャーナル実践例を取りあげたい。ジャーナルを通して約10カ月にわたる適応のプロセスを追っていく。先にも述べたように、ジャーナルは日本語能力の向上を第1目的としたものではない。このケースも同様で、帰国生徒とのコミュニケーションの場を増やし、少しでも彼らの心情を把握するという目的で始められた。

まず学習者である帰国生徒について触れておこう。1995年12月に編入学してきた女子である。ここでは仮にSと呼ぶことにする。Sは父親が残留孤児だったため、父親の養父母が亡くなったのを機に中国東北地方より両親、弟の家族4人で帰国し、定着促進センターに4カ月間入所している。我が校で唯一の国費帰国の2世で、当時14才だった。

Sは95年8月に帰国するまでに中学1年生を終了してきており、英語を始め学力はかなりある方であった。Sとは12月に編入してきてすぐにジャーナルを始めている。ほぼ毎日提出のペースであった。定着促進センターでの4カ月間の研修で、ある程度の日本語力がついており、学力的にも不安のないSには、日本語を使う機会を少しでも増やすためにもいい方法であった。Sは出生時から日本名を与えられており、いずれは日本へ帰国することなど、幼い頃から教えられてきた。しかし、Sには自分が「日本人である」という意識はあったものの、実際は日本に触れることのないままに育った。父親から聞く日本の話からおぼろに日本という国を想像する程度だったのだろう。その父親でさえ、日本語はおろか日本について殆ど知らない状態であった。つまりSにとって日本は近くて遠い国

であり、全くの異文化だったといえよう。

Sは性格的には非常におとなしく、真面目であった。色白で表情も乏しく、自信なげな様子であったが、芯の強さは感じられた。多少頑固な所もあったかもしれない。しかし、基本的には両親や先生の言うことをよく聞く「聞き分けの良い子」だった。色々な思いは持っていたのだろうが、反発したり愚痴や不満をぶつけるなどしてこちらを困らせるようなことはなかった。Sには自分1人の力でこれからを切り開いていかなければならないという強い覚悟のようなものがあった。というのも残留孤児である父親が自分自身は日本語も話せず、仕事にも就かないで家に閉じこもっている状態でありながら、Sや弟への期待は非常に大きかったからである。Sは心より父を尊敬し、また同時に父の辛さや悲しさをわかっていた。それ故にSは大人にならなければならなかったし、自分の本音を両親にぶつけることもできなかったのである。その傾向は我々教員との関係においても同じだった。常に自分を抑える習慣がついていたのかもしれない。

今では表情も明るく、素直で人なつこい中学生になっている。1年半前のSとは別人のようであり、その変化には驚かされる。改めて異文化適応の困難さ、またそれを援助してやる対応や指導の必要性を痛感させられる。

では実際にジャーナルの記述を取りあげながらプロセスを追っていきたい。約10カ月の継続的なやりとりの中から、適応のプロセスにおいて重要なポイントとなる記述を10段階に分けて抜き出した。ジャーナルは必ずしも学習者の記述が先でフィードバックはその返答という固定した形にはならないため、ピックアップしたやり取りもフィードバックから始まったり、Sの記述が続いたりしていることがある。また、ひとつのまとめりと思われる双方の記述を展開した後は、学習者の状況や学習援助者の配慮などをまとめたコメントを付け加えてある。

以下の記述は基本的に原文に忠実に行っている。ジャーナルは日本語指導の場ではないため、原則として添削はしていない。結果として日本語運用能力が向上するのであって、それが目的ではないからである。

1. 【自己紹介や近況報告 関係を築いていく初期段階】

(ジャーナル開始から1週間～2カ月)

フィードバック 12月15日 -----

今日は暖かったですね。Sさん、スカートはどうですか。寒いですか。先生はよく短いスカートをはくので、だいじょうぶです。さむくありません。でも黒龍江省と比べると、日本の冬はとても暖かいでしょう？

先生は中国に行ったことがあります。今年の夏、1カ月長春にいました。日本の夏に比べて、涼しかったです。中国は初めてでした。中国語があまりよくわかりませんでした。でもみんなとても親切でした。来年の夏また行きたいです。次是北京に行きたいですこれから中国語を一生懸命勉強しなければなりませんね。Sさん、おしえてくださいね。

明日は土曜日ですね。Sさんは何をしますか。先生はまだわかりません。何をしたか、おしえてくださいね。

Sの記述 12月17日 -----

今日は休みの日です。寒くないです。私は毎日スカートを着ます。時々、寒いですが。しかし、だいじょうぶです。

今日、私はおじさんのいえへ行きました。中国料理を食べました。おいしいです。それから、デパートへ行きました。いえへ帰ってから宿題をしました。お姉さんに電話をかけましたしかし、お姉さんはいえにいません。日本語を勉強しました。お弟さんに日本語で話しました。おもしろいです。それから本を読みました。テレビを見ました。これは私の休みの日です。

先生の休みの日は何をしますか。中国語を勉強しますか。えが好きですか。私はえが好きです。しかし、下手です。

《コメント》 -----

日記を始めたばかりの頃は、毎日の事象やその感想しか書けない記述が続いている。当時のSは常に表情が堅くて口数も少なく、しかも極端に声が小さかったため、授業の理解度はおろか、何を感じ、考えているかも直接的な接触だけでは測れなかった。よって記述内容が日常体験の羅列であれ、別の場からSを知ることができたのは、関わり方の糸口にもなったように思われる。

この時期は、教育的なフィードバックというよりも、学習援助者である筆者を含めた教師全体に対する緊張を解きほぐし、何でも書けるような場にするため、筆者自身についてのことも隠さず記述した。他愛のないやりとりのようであるが、その後の関係を築いていくためには必要な段階であった。

2, 【友人観について 自発的な自己表現が始まる】

(ジャーナル開始から2カ月)

フィードバック 2月19日 -----

日本での春節は少し淋しいですね。日本人にとって、今日は普通の日と同じですからね。中国の春節がなつかしいですか？新しい友達も、古い友達も、どちらもとても大切だと思います。今は、日本人の友達にしか会えませんが、古い中国の友達にも手紙を書いたりして、ずっと仲良くしてくださいね。友達は一生の宝物です。淋しいとき、つらいとき、悲しいとき、助けてくれます。そして、Sさんも友達を助けてあげなければなりません。これからいろいろなところでたくさん、いい友達を作りましょう。先生とSさんも「いい友達」になるでしょう、いつか。(中略)

友達は、いつまでたっても(永遠に)友達です。でも、それはお互いに相手を大切に思っている間だけです。難しいですが、人が生きていくためには必要なことです。これからゆっくり考えましょう。

Sの記述 2月19日 -----

先生、私は友達を作ることが好きです。私は一生の中で一番楽しいことは友達を作ります。今、中国の学校は休みます。私はどこへ手紙を出しますか。私は手紙を書くとき、中国でいろいろなことと思います。中国の学校は3月冬休みが終わります。中国の学生は休み時、学校へ行きたいです。淋しくてつまらないですから。学校で勉強するとき、休みたいです、つかれたですから。テストの時、とてもつかれます。テストはいい時、うれしいです。テストはわるい時、お父さんやお母さんや先生は「わるい子は勉強しませぬ。頑張ってください。今度、毎日勉強します。80点以下だめです。今度、毎日勉強します。自分のゆめのことや勉強を考えてください。」と言います。とても、こわいです。しかし、私のお父さんやお母さんはとてもやさしいです。「次のテスト頑張るね。だいじょうぶです。自分の勉強自分で頑張ります。」と言いました。先生はいつもこわいです。私は85点の時、先生は「だめ」と言いました。しかし、私の先生はいい先生です。私はとても好きです。

2月27日テストです。私は頑張ります。私は今から日本語を一生懸命勉強します。自分の勉強、自分で頑張ります。今度、学校で中国語いらない、先生、教えてください。私は日本語できないから、ほんとうにさびしいですね。私は上手な日本語を話したいです。私は今から友達をたくさん作るようにがんばります。

《コメント》 -----

単調なやりとりが続いていたが、筆者がフィードバックの中でたまたま友人について触れたとき、Sの記述に変化がみられた。ちょうど中国の正月にあたる春節の頃だったため、Sは中国の親戚や友人と連絡を取り合い、少し感傷的になっていたようだった。率直に中国の思い出やその時の心境を書いている。初めて記述は2ページにもわたり、カラーペンで心を描写したような絵を描いていた。輝く星と月、大きな太陽、両手に花を持って羽ばたく女の子。これから待ち受ける

苦難の道を覚悟しながらも、新生活への希望を膨らませていることがわかる。

これを境にクラブのこと、学校行事のこと、友人や家族のことについて筆者との間に「対話」らしきものが始まった。

3 , 【クラブ活動について フィードバックに込める想い】

(ジャーナル開始から 4 カ月)

S の記述 4 月 1 8 日 -----

先生、私は放送部に入りたいんです。でも、M (帰国生徒) はおこっているよ。私はMと一緒にほしいです。しかし、私は本当にスポーツがあまり好きじゃない。先生、私はどうするのほうがいいです。教えてください。

フィードバック 4 月 1 9 日 -----

クラブは、友達で決めるものではありません。自分が何をしたいか、で決めてください。Sさんはスポーツより文化系の方が合っていると、先生は思います。そして、Mはスポーツがとくいそうです。自分にあったことをしてください。そうすれば友だちもふえるし、いろんな経験や知識が身につきます。先生はSさんは放送部に入ったらいいと思います。自分の道は自分で決めて自分の人生を生きましょう。

S の記述 4 月 1 9 日 -----

今日寒かったです。先生の話しがわかりました。私は放送部に入ります。もう決めました。放送部に入ったら日本語の発音の練習は毎日やります。日本語は上手になります。

先生、私は今、美化と保健係になりました。よくわからないから楽しくないです。もし先生と一緒にいきます。いいですね。でも大丈夫です。ゆっくり勉強しますね。

《コメント》 -----

Sは「全然わかりません」「全然できません」とよく消極的な言動をとっていたのだが、それに対して叱咤を含んだフィードバックを書き始めたのはこのころからだった。

この頃、Sは休憩時間になれば帰入国教室にやってきて、担当者から離れなかった。まだクラスには友人もいなかったし、わからないことが多かったため、逃げ場のように思っていたのだろう。しかし、いつまでも依存し続けていても状況

は変わらない。そのため「たまにはクラスにいなさい」と時には突き放すこともあった。

このように、受け入れてやるだけではなく厳しく接することができたのは、ジャーナルを通した関わりがあったからである。なぜ苦痛なクラスにいななければならないのか、この先生はどうして自分に対して厳しいことを言うのか、ジャーナルでの対話がなされていたからこそ、Sも納得できたのではないと思われる。実行できるできないは別にしても、Sはこちらの伝えたいことがわかっているようだった。帰入国教室での日常の直接的関わりとジャーナルを並行した、コミュニケーションの場の拡大による効果といえよう。

4 , 【マンネリを感じ始めた頃 自己開示の始まり】

(ジャーナル開始後5～6カ月)

Sの記述 5月25日 -----

毎日同じことをします。つまらないでしょう。毎日同じことを書きます。おもしろくないでしょう。先生はいつもたのしくて、おもしろくて、うれしいことをたくさん書きますね。毎日、ずっと同じことをする。日本の学校は中国の学校よりとてもいいですね。でも、中国の学校は楽しかったです。おもしろかったです私はいつも中国の友達や日本人に「学校は楽しい」といいます。でも、本当は楽しくないです。さみしいですよ。今は学校へ行きたくない感じです。

Sの記述 5月26日 -----

もうすぐテストですね。中国のテストを思い出したんですよ。その時、みんな一生けんめいがんばります。みんな楽しみです。この一年間誰が一番真面目ですか。誰が一番勉強がいいですか。先生の一年間の仕事をおわりました。みんなはどのくらいおぼえましたか。みんなはいろいろ考えていました。あの時とても楽しかったです。とても心配です。

フィードバック 5月27日 -----

このノートは「日記」という名前です。「日記」とは、毎日あったことを書くノートです。でも、毎日毎日、同じことしかしません。それは普通です。先生だって、

「今日7時頃起きました。それからお弁当を作って、朝ごはんを食べて、自転車で学校へ行きました。授業をして、放課後生徒としゃべって、それから家へ帰りました。テレビも少し見ました。楽しかったです。」

きっと毎日こんなことを書くことになると思います。確かに毎日同じです。同じことの繰り返し、連

続です。でも思っていることや感じていること、考えていることは毎日違っているはず。このノートには、今、Sさんが考えていること（悲しいこと、嬉しいこと）など心理的なことを書いてもいいんじゃないでしょうか？

中国のことでいいです。中国と日本を比較して思ったことでいいです。「今」を書きましょう。「今」を文字で表そう。先生にはうそをつかなくていいです。何でも言ってください。楽しくなければ楽しくない、さみしければさみしい、いやだったらいや、素直に言ってください。

《コメント》 -----

2学年に進級し、新しいクラスにも慣れた頃、Sは行き詰まりを感じ始めている。慣れてきたとはいえ、まだまだわからないことだらけの生活に疲れてふと我に返ったのか、マンネリズムを訴えている。それに伴う虚しさ、寂しさなどを綴っており、初めて心情の吐露ができています。自己開示の始まりであった。

この時点で筆者は初めてフィードバックの中に、日記の中にもっと心理的なことを書いてもいいのだ、と記述した。それまでは「日本語の練習になる日記だ」としか言っておらず、もちろん内容の指定などもしていなかった。その次の日から、Sは更に自分の今までの経験や考えていることを記述し始めた。

フィードバックによってSが苦しみから救われたり、その中の意見をそのまま受け入れたりすることはなかったが、「書く」という行為によって気持ちが整理されたり、誰かに聞いてもらったという安心感を得たとはいえるだろう。何回か後の記述では、Sなりの落ち着きようが見られるようになった。

5 , 【中国への想い 日本での生活への不満から】

(ジャーナル開始から半年)

Sの記述 6月1日 -----

先生の話がよくわかりました。人のいいところと悪いところ両方ありますね。私は自分のいいところと悪いところがよくわかります。でも、人のいいところと悪いところがよくわかりません。中国でいた時、よくわかります。その時、みんなは中国語ができます。勉強することができます。友達がたくさんできます。だからよくわかります。でも日本へ来たならよくわかりません。日本語ができません。勉強することが難しいです。友達ができません。だから、わかりません。友達のことはあまりききたくないです。たぶん、日本へ来たなら本当の友達ができたくない、ずっと中国にいたい。中国の友達と遊びたいです。

Sの記述 6月2日 -----

今日、LさんとRと一緒に水着を買いに行きました。でも、学生の水着がなかったです。夜、TとRと一緒に遊びました。今日はTと二人で中国の話をしました。自分の中国の友達の話でした。私はいろいろな中国の友達のことを思い出したんです。楽しかったです。(L、R、Tともに帰国生徒)

Sの記述 6月14日 -----

先生の切手ありがとうございます。私はいつもたくさんの手紙を書きます。いつも重いですよ。今の生活とか、今の学校とか、日本と中国の違う所とか、今は何を思っているとか、いっぱい書いたんですよ。でもね、紙と鉛筆だけ話したいことを入りませんよ。たくさんありますからね。

フィードバック 6月15日 -----

「紙と鉛筆だけでは話したいことは全部入りませんよ。たくさんありますからね。」とてもおもしろい言い方ですね。そうですね。顔を見て、言いたいことをいっぱい言って、そしてすぐ返事をもらえるのがいちばんうれしいですね。先生も遠く離れて住んでいる友人に手紙をよく書きますが、いつも「もっと書きたいことがあるのになあ」と思っています。でも全部書けないのは当然。会って話しても、全部は話せないですし。だけどその人のために時間をつくって手紙を書けば、心も一緒に封筒の中に入るよね。もらった人は書いた人の経験+時間+心をもらうんですよ。手紙っていいですね。先生はこの日記はSさんと先生との手紙の交換だと思います。先生は思ったことをできるだけたくさん書きたいです。先生の経験+時間+心をSさんに特別にあげましょう。

《コメント》 -----

この頃、Sは中国への思いが募り始めている。新たに帰国生徒Tが編入してきたことがきっかけになったのかもしれない。日本での生活が思うようにいかず、不満によって余計に中国での思い出が美化されてしまっている。異文化の生活に飛び込み、無我夢中の1年間で過ぎたこの頃、少し気がゆるんだらしい。この頃からSは帰入国教室に入り浸り、取り出し授業や休憩時間に止めどもなく話し続けるようになった。こちらが聞いていようといまいと構わないといった勢いで、こちらは圧倒されて口を挟む隙さえもないほどだった。話の内容はほとんどが中国の時のことで、人に聞かせる思い出話というよりも、目の前に浮かぶ記憶を言葉に表し、中国で生きてきた自分の存在を確かめていくような感じであった。まるで機関銃のようだった。その時はこちらの反応など期待していない。授業は二

の次で、気が済むまで話させてやるが必要であった。

6 , 【今までの思いが一気に吹き出したとき 友人関係のトラブルから】
(ジャーナル開始から半年)

S の記述 6月17日 -----

先生、今日Tは本当におこったんですよ。たぶん私はわかったんですよ。TとMはおこったんです。全部私のせいですよ。Tはどうしておこったんですか。よくわかりません。Mの性格はよくしりませんからね。でもね、Tはやさしい人ですね。どうしておこったんですか。私はTと一緒にの時間すごく短いですね。だからTの性格をよくしりません。自分はいいいことと思っていることをしたら、Tはおこったんですよ。友達は自分の性格とか心理とかわかる時、うれしいでしょう。でもね、時間は長いでしょう。私は一番仲良い友達は私と7年間で友達ですよ。だからね、私の事がよくわかる。私はTと一緒にの時間は意味がないでしょう。Mも、みんな、私のことがわからないんでしょう。私はほんとに中国に帰りたいです。中国にいる人は本当の友達ですよ。私の友達は中国にいますよ。私は本当に泣いたんだよ。日本におる人は私のことが全然わからないんですよ。私は日本にいることの意味がないでしょう。お父さんは「もし日本へ帰ったら息子とか娘とかしあわせだな。」と思ったんですよ。でもね、しあわせじゃないよ、すごく苦しくて、悲しいですよ。

フィードバック 6月17日 -----

Sさんの悲しい、苦しい気持ちはよくわかります。言葉も習慣も考え方もちがう国へ来て1年。とても大変だったでしょう。最初に言葉。そして学校の勉強。学校の行事。毎日毎日忙しいけれど、一生懸命がんばってきたね。

でももっと大変なのは、これからなのかもしれません。今までは必死にいろいろなことをやったけど、これからは少し心も体も言葉も日本に慣れてきて、いろいろ考え始めるからです。

「中国で育った自分」「これから日本で、日本人と一緒に生きる自分」この2つは、きっとSさんがずっと考えていくことだと思います。14年間という長い間、Sさんは中国で育ちました。そして中国人の中でD・W(Sの中国名)は色んなことをしました。勉強したり、友達をつくったり、遊んだり、話をしたり。Sさんは中国では、きっとなんでもうまくできたはずですよ。そして楽しかったはずですよ。それはSさんが中国のこと、中国人のことを時間をかけてよく知っていたからではないのでしょうか。よく知っていたから、よくわからないところがあっても、不安に思ったり悲しんだりしなかったのではないのでしょうか。故郷とか、民族とか、慣れたところとは、そういうところですよ。でもここは日本ですよ。Sさんはまだ日本のことや日本人のことをよく知らない。言葉や、買い物やり方、デパートまでの行き方はもうわかるようになりますが、それはだれでもできるようになる、ほんの表面ですよ。本当に大変なのはこれからですよ。(中略)

でも、Sさんは帰ることはできません。中国人の中で生活することもできません。もちろん、前の学校

に帰って同級生たちと一緒に勉強することもできません。だけど、悲しく思わないでください。Sさんには時間があります。早く日本になれる必要はないのです。あせらないで、ゆっくりと考えてください。Sさんは14年中国にいたでしょう？日本はまだ1年。幟町中学校は半年。2年5組は3カ月。Tと会って1カ月。比べてみてください。日本では始まったばかりですよ。日本で、急に色々なことが中国と同じようになるはずありません。

これは先生が例えば中国へ行っても同じです。急に今のような仕事をしたい、とか日本の友達のように仲のいい人がほしい、と言ってもだめです。ぜったい、簡単にはできません。中国や、中国人や、中国語、中国の習慣、新しい仕事、新しい友人に時間をかけて慣れていかなければ、できないと思います。時間はかかります。それに、その間はとてさみしいし、苦しい。「日本の方がいい、帰りたい。」と思うでしょう。だけどその時がんばらないといけない。努力しないといけない。泣いても、次の日にはまた笑って始めないといけない。

Tのことも急がなくてください。同じ中国人でも考え方のちがう人もいます。わからないこともあります。人はみんなそれぞれ全然ちがうのですから。1カ月で何がわかりますか？おかしいですよ、わかったら。わからないのは当然。じゃあ、わかる努力をしてください。もっと恐れないで話をしてごらん。けんかもしてごらん。そうしたら、きっといい友達になれる。7年の友達と1カ月の友達を比べるのはいけないね。先生とSさんも半年、この日記を書いてもまだよくわからないよ。でももっと時間がたてば、中国と日本の違いを越えると思っています。きっとよくわかる友人になれると思います。あきらめないで、もう一度がんばろう。泣かないで、笑おう。一人じゃないよ。みんな、つらくてもがんばっているんだよ。ゆっくり、がんばろう。

《コメント》 -----

Sが帰国生徒同士でトラブルがあったときの記述である。Sは中国から帰ってきたばかりのTに、大きな期待を持ったようだった。Sの中には「日本語がわからないために、今の自分を理解してくれる人がいないのだ。」という思いが前々からあった。また、Tの中に中国の友人と重なる場所があったのかもしれない。今まで抑えていた率直な自分を一気にさらけ出したのであろう。しかしTには拒絶されたようであった。失望したSは、この時点で同じ中国人、同胞だからといっても、必ずしも自分のことをわかってくれるわけではないのだということに気づいている。そして「自分のことは誰にもわかりやしない」と日本での生活を否定している。この記述は事件があった直後に書いており、放課後黙ってノートを提出すると逃げるようにして帰宅してしまった。その日はSの家まで足を運び、本人に直接手渡ししてやった。果たしてSがフィードバックを読み、それを理解し、言いたいことが伝わったかどうかはわからない。しかし、次の日はいつもどおり登校して来ており、表情や態度に特別変わった様子はなかった。

これをきっかけに、ようやくSとの間に信頼関係がはっきりと感じられ始めた。自分の気持ちをしっかりと受けとめてもらえたことが、Sの心を開かせたのかもしれない。また、学習援助者としての筆者にとっても、口にはできない思いをノートに綴り、苦しい思いを打ち明けてもらえたこと、そしてその苦しみを共感し、共に考えることができるようになったことは大きな収穫となった。

7, 【「わからないこと」に対して 次第に前向きになってきた頃】

(ジャーナル開始から7カ月)

Sの記述 7月8日 -----

今日はクラスマッチがありましたね。わからなかったです。でも、みんな楽しそうですね。1組や2組や4組や6組はすごく強かったです。私達は負けたかも。今日の平和学習もわからなかったです。広島はどうして平和都市と言うとか。いろいろわからなかったです。そうよねえ、私はまだわかいですから、わからないものはいっぱいありますよねえ。でも、がんばります。

フィードバック 7月12日 -----

そうね、わからないことはいっぱいあるよね。先生は外国に行ったとき、たった1カ月しかいなくて、何にもわからないことがたくさんありました。「自分はバカ(頭が悪い)んだろうか。」と不安に思ったり、自分はダメだなあ、と泣いたりしました。外国じゃなくても、知らない人と一緒に何かをするとき、他の人と差を感じてさみしく思ったり、何もしたくなくなったり、もうそれをやめてしまったりします。「わからない」ことはつらいし、はずかしいし、おもしろくない、とっていました。

でも、やめてしまったり、あきらめたりしてしまえば、それで楽にはなりますけど、終わりです。未来はありません。未来がほしければ、今何ができるか考えて、実行しなければいけません。「がんばる」という言葉だけでもいけません。わからないことをたずねたり、自分から話しかけたり、自分が始めないといけないのです。待っているだけでは何も始まりません。

わからないのは当然。じゃあ、それをどうするのか？それはもう、Sさんが決めることです。でも1人じゃないよ。Sさんが「助けて」と言えばいつでも先生たち、友達は手を貸してくれますから。クラスの人も、Sさんがもっと話しかければ、変わってくると思いますよ。

Sの記述 7月12日 -----

先生、テストはもう終わりました。私はねえ、今回のテストはわかったと思いました。私はいつも好きな数学も80点をとってなかったんです。初めはすごく悲しかったです。泣きたいでした。でも、私は考えました。「終わったことは終わったです。終わったことを考えない方がいい」と思いました。「新し

い目標を作って、その目標へ向けてがんばります。」と思います。以上のことばだけじゃなくて「実行しなければいけません」先生は書いたでしょう。

《コメント》 -----

ジャーナルを始めて7カ月目、ようやくSの記述に前向きな言葉が増えてきた。実際、蚊が鳴くような小さい声もいつの間にか大きくなり、口癖だった「全然わかりません」を言わなくなった。また、他の誰よりも帰入国教室に入り浸っていたのが、次第にそこで過ごす時間が少なくなってきた。「わからないなりにがんばってみよう、まだこれからではないか。」という、いい意味での自信と余裕が言動の端々で感じられるようになってきた。

8 , 【新たな帰国生徒を迎えるにあたって 自分のかつてを振り返る機会】
(ジャーナル開始から9カ月)

フィードバック 9月18日 -----

さてさて、また新しい人が来ますね。どんな人だろうね？姉弟だと聞いていますが、どんな性格なんだろう？よく話す人かな、おとなしい人かな、スポーツの好きな人かな？

SさんやMが初めて幟中に来たのは去年の12月。早いね、もう9カ月たった。今思うと、先生はいつもきびしすぎたかな。SさんやMが初めてでよくわからないことでも「大丈夫よ。がんばればできるよ。」って、無理やりやらせたこともあったね。2人にとって、大変な1年だったろうと思います。でも、SさんもMも、先生たちの気持ちがよくわかる人です。先生たちはとても幸せですよ。

明日来る2人とも、信頼できる関係になれたらいいな、と思います。最初は大変だろうから、先ばいのSさんたちが色々教えてあげてくださいね。

日本の学校のこと、先生のこと、授業のこと、そして中国のことを思い出してさみしがっていたら、中国の話をしてあげてください。

Sの記述 9月18日 -----

先生、明日新しい人が来るよね。楽しみにしています。だって、私は中国から日本に来るときのことを思い出すかもしれません。もちろん、いろいろがありました。困ることとか、難しいこととか、心配することとか、楽しいこととか……明日、新しい人が来たら、できることを必ず教えてあげますと思いますよ。

Sの記述 9月28日 -----

今日、Jさん(帰国生徒)は私の家に来ました。一緒に宿題をしました。いろいろを話しました。Jさんは日本に来たばかりですね。今のクラスの人はずごく親切で毎日、楽しそうな顔をしています。Jさんは何でもわからないですから、すごく悲しそうです。いつも、中国の友達のことや、毎日楽しい学校の生活や思い出したそうです。私は日本に来るときと同じです。

《コメント》 -----

9月の終わり、ジャーナルを始めて9カ月の頃、また新たな帰国生徒を迎えることになった。前出のTが5月に編入してきた時よりも、ずいぶん落ち着いた状態になっていたSには、自分のかつてを振り返る良いきっかけとなったようである。冷静に落ち着いて回顧できているし、Tの時にはなかった、様々な感情を抱いているようだった。

日本語がわからなくて、何もできないと悲観的になるJのために、Sは教師やクラスメイトたちとの間に立ち、通訳をしたり、学校のことを伝えてくれたりした。「あなたの気持ちは、同じ立場だった私たちが一番よくわかる。」「誰もが通るつらい道だ」と他の帰国生徒たちと一緒に、まだ意思疎通のできない教師たちの言葉を代弁してくれたりもした。

9, 【ジャーナルについてSの想い 自分の過去も現在も肯定】

(ジャーナル開始から9カ月)

Sの記述 9月27日 -----

日記のことについておもしろいことや悲しいことや心のことなど。いろいろを書いていますね。日本語もだんだんうまくなれるし、先生と友達になれるし、すごくいい勉強の方法と思います。

先生、私たちはそうですね。この日記いろいろを書いていますよね。私は最初から今まで日本語はだんだんうまくなっていますと思いますよ。

フィードバック 10月3日 -----

先生は、日記はすごくいい方法だと思っています。他の先生たちにも教えてあげたいのです。どうでしょうか、日記の中の文章を、他の先生たちに見せてあげてもいいのでしょうか?どこの誰かは絶対にわからないようにします。日本語の先生たちはとても関心があると思います。「自分の学生も色々考えている。

どうしてあげたらいいだろう？」とよく言います。心配しているのです。でも、どうすればいいのかわからない。もし先生とSさんの日記を知って、それを他の人たちが始めて、それが支えになるとしたら……すごく意味のあることではないでしょうか。

広島にはもちろん、日本中にはとても多くの外国人がいます。文化や習慣の違い、言葉がわからない、ということで苦しんでいる人はすごくたくさんいるのです。そんな人たちを1人でも少なくするために、先生とSさんの日記はすごく力を持っているのではないのでしょうか。先生は1人でも多くの人に知ってほしいのです。

どう思いますか？少しだけ、ノートを公開してもいいのでしょうか。Sさんが嫌ならしません。日本語が上手になり、よく知らない2人が心の交流ができた例を教えてあげるとは、今、この問題で苦しんでいる人への光になるのではないのでしょうか。

Sの記述 10月4日 -----

先生、日記は本当に他の人に見せてはいけないけど、私たちの日記はひみつとかあまりないでしょう。心の交流がいっぱい書いてるだけよね。他の人に見せてもいいと思いますよ。倉谷先生は勉強だけ教えてくれる先生ではないでしょう。私はもう先生のこと友だちと思いましたよ。心の交流ができる友だち、心の交流ができる先生。そうでしょう。

《コメント》 -----

ジャーナルを公開することに対するSの意見を聞いたときの記述である。これまで筆者は、ジャーナル・アプローチで最も重要な信頼関係を築くことについて、「いい友達になろう」というフレーズに置き換えて記述してきた。Sはなかなか反応を見せなかったが、このとき初めて筆者を「友達」と思っていること、つまりお互いに信頼する存在になれたことを伝えてくれている。10カ月にわたるジャーナルについても、自分の成長の軌跡として誇らしく思っていることがよくわかる。

10, 【初めての友達 巣立ち】

(ジャーナル開始から10カ月)

Sの記述 10月24日 -----

今日の午後、先生はいなかったですね。すごくさびしかったですよ。今日ね、Bさんは私にさそったよ。一緒に映画を見に行かない？その時、すごくうれしかったです。でも、映画を見に行くのはたくさんお金

を使うでしょう。だから自分のお金がないから、お母さんに言ったらね、お母さんたちも大変じゃないですか、おばさん来る時、たくさんお金を使ったからね。ちょっと残念だけど行けません。でもうれしかったです。だってクラスの人は初めて私にさそったからね。う・れ・し・い・よ！

フィードバック 10月25日 -----

そうですか、最近よくBさんと一緒にいるもんね。Bさんはきっと学校だけでなく、休みの日に他のところでもSさんと一緒にいたいな、と思ったんですね。もし映画を見たら、それについての感想も話せたりして、もっとお互いの考え方とか、性格とかわかるようになるものね。もちろん映画だけじゃないよ、お互いのことをもっと知るための方法は、休みの日にどこか遊びに行くだけでもいいじゃない？

ところで、Bさんに上手に断りましたか？ どうしていけないのか、本当はすごく行きたいのだとか、次にまたどこか一緒に行こうとか、さそってくれてすごく嬉しいとか……ちゃんと言葉にして伝えましたか？ 言葉は心の中のことをだれかに伝えるためにあるんだよ。きっとBさんも、そんなSさんの心の中を教えてもらったら喜ぶと思いますよ。Sさんはこの日記によって、自分の心を日本語で表現することがすごく上手になっています。この日記の中だけではなくて、友達にも心を伝えることができるはずだよ。いい友達になれて、そして他にもいろいろな友達を作っていければいいですね。友達の輪を広げていこう！

《コメント》 -----

Sには帰入国生徒以外に、友達と呼べる存在がいなかった。クラスに戻っても1人でぼつんとしていることが多かったようだ。12月に編入してきて10カ月、クラス活動や行事にも慣れ、ようやく一緒に過ごす友人を得ることができた。中国では親しい友人関係があったSにとって、帰入国生徒以外にはまだ友人と呼べる存在がない、ということは常に心の中に引っかかっていたに違いない。休憩時間にはクラスメイトと一緒に帰入国教室へ来るようになり、この頃よりクラスの1員であるという意識が持て始め、以後自然にとけ込んでいけたようだった。

時期的なことでも大きかったのかもしれないが、ジャーナルと普段の接触を通して筆者との信頼関係がしっかりと確立してきた頃からSには日本人の友人ができています。それと同じ頃、今までは「できない、わからない」とあきらめがちだった定期テストでは、自分から目標点を定め、満足する結果を得ている。そして週4時間取り出し授業をしていた国語も全体授業に戻り帰入国教室にいる時間は更に短くなった。まさに「巣立ち」を迎えたといえよう。

総合的な考察

このように、Sはわずか1年足らずで目を見張るほどの成長を遂げた。始めた当初は、果たして14歳という年少者にもジャーナルは有効なのかという疑問があったことは否めない。しかし頑なだったSは少しずつ自己開示し、思いをぶつけられる人間関係を筆者との間に築きながら、適応の軌跡を残していつている。言葉ができないというコンプレックス、同じ帰入国生徒との関係、日本人の友人ができない悩みなど、様々な思いを文字に表し、伝えることができるようになってきている。また、ここでは見ることができないが、記述の字にはその時のSの感情が克明に現れていた。不安気でごんまりとまとめた字、たまらない気持ちで書き殴ったのであろう乱れた字、嬉しげで踊るような字、毎日微妙に異なり、それは1つのメッセージにもなった。

Sは筆者との対人関係を通して、異文化であった日本社会での人間関係の築き方を経験的に学んだのではないだろうか。Sは約1年かけて日本語で「書くこと」による対話を続け、相手だけではなく自分と向き合う作業をしてきた。そのことは、異文化の中で大人になろうとしている段階のSにとって、必要な精神活動の場であったのではないだろうか。1つ1つをゆっくりと消化していく適応のプロセスが見られたし、それに伴って日本語力も精神力も伸びた。

Sは精神的なことに影響されやすいため、いろいろな面で伸び悩んでいた。異文化に積極的に働きかけようとする気力が失われやすく、学校生活においても、その場しのぎの受け身的な態度になる傾向があった。しかし、Sはその年齢にしてはしっかりとものを考えることができたし、文章を書くことも好きだった。そのような背景を考えると、Sの適応においてジャーナル・アプローチが一役買ったことは確かであろう。もちろんこの結果を予測していたわけではないし、結果を導くために始めたのでもない。ジャーナルの意義はそのプロセスにある。たとえ結果が得られなかったとしても、そのときどきでSの状況を把握し、ジャーナルと普段の関わりの中で何らかの対応をしてやれたことは、意味のあることに違いない。

ジャーナル・アプローチは学習者のみならず、学習援助者にとってもまた、異文化理解の場であることは で述べた。このケースにおいても、筆者自身年齢や

言葉のちがう、しかも精神的にかなり落ち込みやすく浮き沈みのある生徒と、一個人として向かい合うことは苦痛な作業であった。しかし、異文化の壁を越えて1人の人間と向かい合えたことは大きな喜びとなり、支えになったように感じている。やはりお互いに「必要だ」と思うことのできる存在になれたことが、Sが安心して異文化の中で次の人間関係を築いていく力になったのではないだろうか。

ここで付け加えておきたいのだが、Sは比較的順調に適応した生徒であった。日本語の習得も早かったし、大きな問題を起こして手を煩わせるようなこともなかった。しかし、それでもこれだけの心の葛藤があったのである。とかく我々はおとなしく、表面上は問題のない生徒の適応は軽視しがちであるが、もっと目を向けるべきなのかもしれない。このケースは改めて現状を見直すきっかけを与えてくれたように思う。

帰国生徒へのジャーナル活用の意義と展望

これまでの考察により、ジャーナル・アプローチには、学習者に自発的な「伝えたい、理解されたい、理解したい」といった内的動機づけを与え、そしてそれによって日本語の運用能力をつける効果があることがわかった。更に何よりも評価できるのは環境への適応、視野の拡大、人間的成長をも得られるということであった。また、ケースによっては年少者にも有効であることがわかった。

ただ、過信は禁物である。これはどの指導法にもいえることではあるが、ジャーナル・アプローチは決して万能ではない。今回取りあげたケースにおいても、日本語を含む教科指導や日常の直接的な関わりが、ジャーナル・アプローチと偶然うまく重なって、初めて一つの取り組みとして形となったのである。Sのパーソナリティや発達段階、筆者との相性なども関係あっただろう。

つまり、果たしてジャーナルがSの適応にどのくらい効果があったのか、また、ジャーナルをしなければどうだったのか、そのようなことは図り得ないのである。また言ってみれば、今回の関わりが果たしてベストであったかどうかなどもわからない。異文化理解には終着点や結果というものはない。それ故にプロセスこそが重要であり、意義があるのだろう。

帰国生徒たちはとかく拒絶されたと感じたり孤独感に陥ったりしやすい。帰入国教室での担当者との関わりは、彼らにとって非常に大きな意味を持っているのではないだろうか。担当者こそが彼らが初めて深く接する日本人であることも多いし、接触期間や依存度も自ずと高くなる。これからますます多様化していくであろう学校現場には、日本語保障の面からだけではなく、様々な問題に対し、もっと専門的に対応ができる場が求められるのではないだろうか。帰入国生徒の受け入れ体制や帰入国教室の設備・条件等に更なる充実が望まれる。

最後にもう1つ、ジャーナルの活用法について触れておきたい。ジャーナル・アプローチには様々な条件が必要に思われるかもしれないが、帰国生徒たちに基本的に必要なのはコミュニケーションであり、向かい合ってくれる存在である。「この人は自分のことを考えてくれている。」「この人には頼ってもいいんだ。」という安心感を与えることは、どれだけ彼らの生活に安心感と支えを与えるだろうか。できればあまり構えず、1つのコミュニケーションの手段として気軽に始めてみてもらいたいと思う。特にクラスで感じる不安を軽くするためにも、ぜひ担任の先生に活用してもらいたい。現在のところ、帰入国教室がある学校の方がまれであるし、先にも述べたが中学校ではどうしても担任教師との関係が薄くなる。学校生活のほとんどを過ごす所属学級ではわからないことが多すぎるのである。わからないことはすべて帰入国教室まかせという姿勢があると、いつまでも帰国生徒たちは教室に依存し続けてしまうのである。帰入国教室の活動は、あくまでも帰入国生徒が他の生徒たちと一緒に、安心して学校生活を送れるようになることが目標なのであり、よって学年やクラスからの積極的な対応も必要となる。

我が校でも、帰国したばかりの生徒に担任の先生がジャーナルを実践された例がある。日本語がどのくらいできるのか把握できていない担任と、先生はこわいものだ、自分の日本語はまだわかってもらえないはずだと思いこんでいる生徒とのケースである。何かきっかけになれば、ということで始めたノートの交換はほんの何カ月か、何回かのやりとりではあったが、その距離は確実に縮まったという。帰国生徒が初めから思いをはっきりとぶつけるといえることはないにしても、今どんな思いか、何があったかなど、ちょっとしたことでも書いていけば、担任は状況を把握することができる。ある時はクラスメイトとの誤解やくい違いを、

さりげなく間に入ってうまく取り持つことができたという。生徒の方も、自信なく書いていた記述に励ましの言葉が返ってくると、非常にいい表情をしていた。多忙な中、自分に時間を割いてくれる先生の誠意が何よりも嬉しかったらしい。

ジャーナルには決まった形はない。相手を理解したいという気持ちさえあれば、実に多くの可能性を持ったコミュニケーションの手段であり、異文化理解の手だてとなるのではないだろうか。今後、様々な現場でのジャーナル・アプローチの展開に期待したい。

《 参考文献 》

- 倉地暁美(1992)『対話からの異文化理解』 勁草書房
- (1993)「ジャーナル・アプローチの展開 日本語・日本事情教育の新しい方向に向けて」『日本語教育』82号
pp123～133
- (1995)「異文化教育における学習援助者の育成 ジャーナル・サポート・ネットワークの構築に向けて」 大学論集 第25集
pp129～144 広島大学大学教育研究センター
- 河野理恵(1996)「ジャーナル・アプローチを通しての異文化理解過程 日本語教師と外国人留学生との相互作用」
東京外国語大学大学院地域文化研究科修士論文
- J S N 編(1996)「ジャーナル・サポート・ネットワーク 文化を越えたコミュニケーション相互理解のために」
- 中西晃・佐藤郡衛(1995)『外国人児童・生徒教育への取り組み 学校共生への道』 教育出版